

杉浦 滋子・コーブルアン ワチャラチャイ (麗澤大学)

要旨

タイ語の限定的関係節においては関係節代名詞 *thîi* と裸の関係節が見られるが、指示的名詞句においては *thîi* のみが許容されること、そして非指示的名詞句においては名詞句の表す個体が発話直前に知覚された、あるいは発話によって聞き手の知識に導入された場合には裸の関係節のみが許容され、発話以前に知覚されていた場合には *thîi* と裸の関係節どちらも許容されると主張した。ソムキャット(2000)は非限定的関係節において関係節の内容が談話の流れの中で重要である場合には *sûŋ* でなく *thîi* が用いられると述べているが、この談話的な *thîi* と限定的関係節の *thîi* の二つは区別すべきである。また、タイ語の二つのコピュラのうち、指示的名詞句が主語の場合には *pen*、非指示的名詞句が主語の場合には *khuu* が用いられると指摘した。

1. タイ語の節による名詞修飾

タイ語の名詞が節相当のものに修飾される場合には次のような形式が存在する。ただし、裸の関係節による修飾は主名詞が関係節の主語である場合に限られる。

(1) 関係代名詞が表れる場合

a. *thîi*

nák rian [thîi maa sǎay]
 学生 thîi 来る 遅れる
 「遅れて来た学生」

b. *sûŋ*

chian mǎy [sûŋ pen muan kǎw]
 チェンマイ sûŋ COP¹ 町 古い
 「古い町であるチェンマイ」

c. *?an yǐŋ* [*?an pen thîi rák khǒŋ khâa pa cáw*]

女性 ?an COP 恋人 所有 私
 「私の恋人である女性」

(2) 関係代名詞が表れない場合 (裸の関係節による修飾)

dek [Ø maa sǎay]
 子供 Ø 来る 遅れる
 「遅れて来た子供」

この4種類の中で *?an* は現代的な文章には使われないので、より一般的な *thîi*、*sûŋ*、裸の関係節の使用に関わる条件を考察する。

¹ COP: コピュラ動詞

2. 先行研究

2.1 非限定的関係節における sũŋ / thũi

sũŋ が非限定的関係節に用いられるという指摘があるが、thũi 関係節が限定的関係節に限られるわけではなく、(3)で見るように非制限的關係節にも用いられる (ソムキヤット 2000)。ソムキヤット(2000)は、非限定的な名詞修飾には普通 sũŋ が使われるが、関係節の内容が談話の流れの中で重要であるときには thũi が使われると述べる。(3)の例では、「妹に目をかけてくれる」ことが「感謝する」理由として解釈できる。談話的要因があるとの主張である。

(3) rá daa khòp khun wí? pát [thũi kà rú? naa tòo nóŋ]

ラダー 感謝する ウィパット thũi 目をかける に対する 妹

「ラダーは自分の妹に目をかけるウィパットに感謝した。」

日本語でも固有名詞を修飾する非限定的な節が談話の中で重要である例が観察される。(4)では、テキストの理解に「木谷が必死に訴える」「それに対して堀江は黙ってうなずくのみ」「そのことに木谷は一層苛立つ」という一連の流れが必須であるため、非限定的な修飾節がないとテキストの解釈に支障がある。

(4)a. 木谷は、必死に訴えた。ただ黙ってうなずく堀江に、木谷は一層苛立った。(渡辺 房男『インサイダー』幻冬舎 2004) ²

b. 木谷は、必死に訴えた。堀江に、木谷は一層苛立った。

非限定的関係節の内容が重要である場合に thũi が用いられることはコーブルアン(2017)でも確認された。

2.2 限定的関係節における thũi/裸

Iwasaki and Ingkaphirom(2006)は thũi と裸の関係節を考察し、thũi は specific な事態を記述する関係節からは省略できないとした。(5)の mǎa [thũi kát dèk mǎa-waan-ní] (昨日子供を噛んだ犬) のように時間の副詞を含む specific な事態を表す関係節からは thũi を省略することができないのに対し、(6)の dèk [(thũi) rian kèn] (よく勉強する子供) のように一般的な性質を描写する関係節からは省略できるとする。高橋(2011)も裸の関係節は話者のモダリティ解釈やアスペクト解釈を明示化できず、断定性/定形性が低いとする。

(5) mǎa [thũi kát dèk mǎa-waan-ní] thuuk cǎw-nǎa-thũi cǎp pay l'e'ew (p.249)

犬 thũi 噛む 子供 昨日 受動 警官 捕まる 行く 完了

「昨日子供を噛んだ犬は警官に捕まえられた」

(6) Èk pen dèk [(thũi) rian kèn] (p.250)

エク COP 子供 thũi 勉強する よく

「エクはよく勉強する子供だ」

² 例文は BCCWJ (『現代日本語書き言葉均衡コーパス』) から得た。

Iwasaki and Ingkaphirom(2006)が挙げる次の例では時間の副詞があり、specific な事態と考えられるが「料理を作る人」は意味の上で（「料理人」のような）ある特定のタイプの人間として考えることができるからと説明されている。

(7) khon [(thii) tham kàp-khăaw mûa-waan-nii] pen khay (p.250)

人 thii 作る 料理 昨日 COP 誰

「昨日料理を作った人は誰？」

実際に裸の関係節と同形の形式が普通名詞として用いられる。(8)では khon kàp rôl が「運転手」という意味の語彙項目である。

(8) yaat phôm pen khon kàp rôl

親戚 私 COP 人 運転する 車

「私の親戚は運転手だ。」

しかし、(7)では thii が省略できるが、(9)ではできない。Iwasaki and Ingkaphirom (2006) の説明では(7)と(9)の違いが説明できないので、異なる説明が必要となる。

(9) khon thii tham kàp khăaw mûa waan nii wan nii mây maa

人 thii 作る 料理 昨日 今日 否定 来る

「昨日料理を作った人は今日は来ていない。」

3.名詞句の指示性

名詞述語文の研究においては、指示的名詞句と非指示的名詞句が区別される(Donnellan 1966、西山 2003)。世界の中のある個体（または種）を指示するために用いられるのが指示的名詞句で、それ以外は非指示的名詞句である。英語(10a-d)と、それに対応する日本語(11a-d)で例示する。英語の(10a)の a student、日本語の(11a)の「学生」は個体を指示するが(10b)の a student、(11b)の「学生」は「学生という集合に属する」ことを表す be a student、「学生だ」の一部であり、非指示的である。(10c)の the rector of Thammasat University、(11c)の「タンマサート大学の学長」は個体を指示するが(10d)の the rector of Thammasat University、(11d)の「タンマサート大学の学長」は役割を表し、非指示的である³。(10b)(11b)は主語の性質を表す措定文、(10d)(11d)は役割をもつ個体を指定する指定文と呼ばれるものである。措定文の述語も指定文で役割を表す名詞句も非指示的である。

(10)a. A student came to see me.

b. She is a student.

³ (10d)はイントネーションによって他の解釈も可能。

- c. The rector of Thammasat University made a speech.
- d. Dr. Suchaard is the rector of Thammasat University.

(11)a. 学生が訪ねて来た。

- b. 彼女は学生だ。
- c. タンマサート大学の学長がスピーチをした。
- d. スチャート博士がタンマサート大学の学長だ。

そして、タイ語で *thii* が省略できる例を見ると(6)の *dèk [(thii) rian kèŋ]* (よく勉強する子供) は英語(10a)の *a student*、日本語(11a)の「学生」と同様、指定文の述語である非指示的名詞句、(7)の *khon [(thii) tham kàp-khǎaw mûa-waan-nii]* (昨日料理をした人) は(10d)の *the rector of Thammasat University*、(11d)の「タンマサート大学の学長」と同様、指定文において役割を表す非指示的名詞句である。それに対し、(9)の *khon thii tham kàp-khǎaw mûa-waan-nii* (昨日料理をした人) は指示的名詞句であり、*thii* が省略できない。つまり、非指示的である場合には *thii* 関係節と裸の関係節どちらも文法的であるのに対し、指示的である場合には *thii* が必須となる。そして(8)で見たように語彙項目となっている場合には *thii* は現れることができない。

さらに、タイ語では指示的名詞句と非指示的名詞句の違いが別の形で見て取れる。タイ語には *pen*、*khuu* の二つのコピュラ動詞があるが、指定文においては指示的名詞句と非指示的名詞句のどちらが主語になるかで使い分けられる。(12a)のように指示的名詞句が主語である場合には *pen*、(12b)のように非指示的名詞句が主語である場合 *khuu* が用いられる。

- (12)a. *dóoktǎe sùcháat pen àthíkaanbòodii khǎwŋ mahāawíthayaalay thammasāt*
 スチャート博士 COP 学長 所有 大学 タンマサート
 「スチャート博士はタンマサート大学の学長だ。」
- b. *àthíkaanbòodii khǎwŋ mahāawíthayaalay thammasāt khuu dóoktǎe sùcháat*
 学長 所有 大学 タンマサート COP スチャート博士
 「タンマサート大学の学長はスチャート博士だ。」

(12b)を答えとする疑問文は次の二つが可能である。⁴

- (13)a. *khay pen àthíkaanbòodii khǎwŋ mahāawíthayaalay thammasāt*
 誰 COP 学長 所有 大学 タンマサート
- b. *àthíkaanbòodii khǎwŋ mahāawíthayaalay thammasāt khuu khay*
 学長 所有 大学 タンマサート COP 誰

khay 「誰」のような疑問詞が指示的と考えるのは直感に反するが、答えとなる名詞句の指示性と同じと考えれば(13a-b)における *pen/ khuu* の分布が説明される。

⁴ ただし(12b)は日常会話では用いられない。

4. 指定文、措定文以外の文に現れる名詞句の指示性

非指示的名詞句として措定文の述語の名詞句と指定文において役割を表す名詞句を挙げたが、存在文を見てみよう。

- (14) eʔ, mii khon kam laŋ wɨŋ cók kɨŋ yúu
あつ いる 人 進行 走る ジョギング 存在
「あつ、ジョギングをしている人がいる。」

(14)のような存在文において、名詞句は世界の中のある個体を指示する。しかし(14)では *thii* が現れない。タイ語では指示的名詞句に *thii* が用いられるという前節の結論に沿った形で考えると、発話の文脈で知覚できるという形でのみ指し示すことができるもの（発話以前に話し手の知る世界に存在しなかったもの）を表す名詞句は非指示的と考えられる。(15)のような例でも発話の文脈で知覚できるのみの個体が主語である場合、疑問文であっても平叙文であっても *khuu* が使われている。前節で非指示的名詞句が主語である場合にはコピーに *khuu* が用いられるとしたので、知覚できるのみの個体は非指示的と考え、(14)で *thii* が現れないことと合わせて説明することができる。

- (15)a. khon noon khuu khray
人 あの COP 誰
「あの人は誰ですか？」
b. khon noon khuu àthikaanbòodii khɔ̌ɔŋ mahāawitthayaalay thammāsāt
人 あの COP 学長 所有 大学 タンマサート
「あの人はタンマサート大学の学長です。」

ところで、話し手が知らない子供が話し手が知らない歌を歌っている場面では(16)のように *thii* と裸のどちらも可能である。

- (16) dèk (thii) rɔ́ɔŋ phleeŋ cȟu ʔàʔ ray⁵
子供 *thii* 歌う 歌 名前 何
「歌を歌っている子供の名前は何？」

「歌っている子供」はその場で知覚できるだけの個体であるが、*thii* を用いることが可能である。(14)と(16)の違いはどのように説明できるだろうか。違いとしては(14)では個体は発話直前に初めて知覚されたのに対し、(16)ではそうではないということがある。とすると言語外世界に存在する個体を表す名詞句の限定的関係節はこの段階で次のように整理できる。つまり *thii* が必須なのは指示的名詞句においてのみである。

⁵ この文は「子供が歌っているのは何の歌？」とも解釈できる。

発話の場面以前に話し手の知識の中に存在（＝指示的名詞句）		thii 必須
発話の場面で知覚されるのみ	発話以前に知覚	thii/裸 どちらも可
	発話直前に知覚	thii 不可

ある集合に属する要素の多寡を述べる文を見ると、(17)のようにその集合を表す名詞句では thii/裸のどちらも許容される。このような名詞句も指示的名詞句ではないので、上記の観察と符合する。

- (17) thii mahăawíthayaalay níi mii nàk rian (thii) maarian dooy cà krá yaan yûu
 に 大学 この いる 学生 thii 通学する で 自転車 存在 たくさん
 「この大学には自転車で通学する学生がたくさんいる。」

また、次の文においても裸の関係節のみが許容される。⁶

- (18) phôm mii phâan yûu kruŋ thêep
 私 いる 友達 いる バンコク
 「私にはバンコクに友達がいる。」

phâan（友達）が指す個体はもちろん話し手の知識の中には発話場面以前から存在しているが、聞き手の知識の中には初めて導入される。このような文脈でも thii は不可であるため、上の図を以下のように修正する。

発話の場面以前に話し手・聞き手の知識の中に存在（＝指示的名詞句）		thii 必須
上記以外（話し手の知識の中にのみ存在、あるいは発話の場面で知覚されるのみ）	発話以前に知覚	thii/裸 どちらも可
	発話直前に知覚、あるいは発話で導入	thii 不可

発話以前に話し手、聞き手両方の知る世界に存在していることが指示的名詞句であるための条件ということになる。このような条件がない限り話し手も聞き手も直示的にしか個体に言及することができないので、この条件は当然のものと言える。

5.二つの thii

thii が談話的要因によって非制限的關係節に用いられること、そして制限的關係節では指示的名詞句において必須、非指示的名詞句で省略可能あるいは不可であることを見た。ある名詞句が指示的か非指示的かは意味のレベルでのことと考えられるので、非制限的關係節における談話的な要因のみを含む制約とは異なる制約があることになる。このことから、二つの thii を認めるべきだと考える。一つは(4)のように非制限的關係節に現れ、關係節が談話の流れの中で重要であることを示す。もう一つは制限的關係節に現れ、指示的名詞

⁶ 談話的要因により thii が用いられる場合について後述する。

句において必須、非指示的名詞句においてある談話的条件下では許容され、別の条件下では許容されない。

ところで、(17)の文と同時に *thii* が表れる(19)の文も可能であるが、その場合にはこの後に関係節名詞句の指す個体についての談話が続く。

(19) *phôm mii phûan thii yûu kruŋ thêep*

私 いる 友達 *thii* いる バンコク

「私にはバンコクに友達がいる。」

非制限的關係節の場合には関係節の内容が談話の流れにおいて重要であったが、(19)では名詞句によって表される個体が続く談話に関わることを表す。同じ談話的な要請によるものではあるが性質が異なり、(20)に例示する英語の「不定の *this*」と呼ばれるものと共通点がある(Ionin 2006)。(19)における *thii* の使用も(20)における *this* の使用もある個体を聞き手の知識に導入しながらその個体への言及が続くことを予告する。非指示的名詞句に指示的名詞句を表す形式を用いることで談話の流れを予告すると言えよう。

(20) Sarah wants to read a/*this* book about butterflies, but she can't find it.

「サラは蝶に関するある本を読みたがっているが見つけられていない。」

6. 結び

本発表ではタイ語関係節代名詞 *thii* を考察し、非制限的關係節に談話の要請によって現れる *thii* と制限的關係節に現れ、指示的名詞句においては必須であり非指示的名詞句において省略されうる *thii* の二種類を認めるべきだと主張した。また、タイ語の二つのコピュラ *pen/khuu* について、主語が指示的名詞句の場合には *pen*、非指示的名詞句の場合には *khuu* が現れると指摘した。

参考文献 コーブルアン、ワチャラチャイ(2017)「物語ナラティブにおけるタイ語の関係節の使用—『*thii* 関係節』『*sûŋ* 関係節』『裸の関係節』各関係節の使われ方を中心に—」『言語と文明』15:33-59 麗澤大学大学院言語教育研究科／ソムキヤット、チャウエンキジワニッシュ(2000)「日本語・タイ語における『非制限』の連体修飾節」『国際交流基金バンコク日本語センター紀要』3／高橋清子(2011)「タイ語の関係節構文」長谷川信子(編)『70年代生成文法再認識：日本研究の地平』、253-275. 開拓社／西山佑司(2003)『日本語の名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房／Donnellan, Keith S. (1966). "Reference and Definite Descriptions". *The Philosophical Review*, Vol. 75, No. 3. 75 (3): 281-304／Ionin, Tania (2006) "This is definitely specific: Specificity and definiteness in article systems." *Natural Language Semantics* 14:175-234. /Iwasaki & Ingkaphirom (2005) *A Reference Grammar of Thai*, Cambridge University Press. /Singnoi, Unchalee (2000). "Nominal Construction in Thai". Ph.D dissertation. The University of Oregon.